
ジンニスタン EX

二宮酒匂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンニスタン EX

【Nコード】

N7783R

【作者名】

二宮酒匂

【あらすじ】

この小説は本編のほうに統合しました。続きもそちらに掲載します。のでこちらは放置となります。

EX1・小夜の寢覚め（前書き）

ラブコメを試みます。戦記＋恋愛で、比較的真面目にファンタジーをやっている本編に対し、こちらの番外編はそれより軽めで恋愛模様オンリー。「短いわりにコミカル部分や変態成分が多すぎて、本編におさめるにはバランスが悪いかな」と作者が判断した話をそのつど放りこんでいくつもりです。

載せる予定の話の成分は、もしもじだったり甘々だったり微妙に変態ちつくだったりします。恋愛ものや微工口が苦手という人には向きませんので注意。

EX 1・小夜の寢覚め

ジン族の大貴族の娘、ファリザードは薄目をあけた。

意識がもどったとき彼女に最初に見えたものは、闇だった。

小麦色肌の美貌のなかで、琥珀のような金の瞳がぼんやりと焦点をさまよわせる。十二歳の少女は、半醒状態で疑問をいだいた。

（ここは……どこ？　なんで前がみえないの？）

ただ暗い場所というだけならば、彼女の視界はさほどさまたげられないはずだ。

人族からは「ダークエルフ」「砂漠エルフ」とも呼ばれるジン族は、もともと夜に順応した種族だったのだから。酷暑の昼間をさけて活動する、砂漠のほかの夜行性の動物とおなじように。

つぎに知覚したのは、床の冷たさであった。よこたわっている岩肌の感触はごつごつした氷も同然で、骨まで冷えがしみてくる。明け方の砂漠は寒い——ファリザードは尖った長い耳をぶるつと震わせた。

けれど肌に触れてくるのは、岩と冴えた夜気ばかりではなかった。ぬくもりをもった何かがファリザードのきやしゃな肢体に寄り添っている。

（温かいな……そうか、なにか目の前にあるから見えないんだ……）

とろとろと夢ごちで、唯一のぬくもりにもっとくつつこうと肌身をすりよせ——ファリザードは気がついた。

これは生命のぬくみだ。人肌だ。

（あれ、……え、）

もやが晴れるように眠気が急速に減退していく——少女は状況を確認しようと顔をうわむけた。

まぶたを閉じたペレウスの顔があった。

片耳をちぎられた少年——同じ年の、異文明の地ヘラスの王子——かれの女の子のように整った白皙の顔は、起きているときには強情そうに食いしばっている唇をゆるませている。その唇がファリザードのそれにかするほどの至近距離で、ペレウスは浅い寝息をたてていた。

腰布を巻いただけの裸のペレウスに添い寝されており、かれの腕がファリザードの繊美な胴にまわされている。

そしてファリザード自身も一糸まとわぬ姿で、美しくつやめいた褐色肌が余すところなくあらわになっていた。

「————~~~~~!!?」

“少年に裸で抱きしめられて、その胸に顔をうずめていた”ことを認識したとたん思考が飛び散った。

反射的に背をそらしてファリザードはのけぞりかけた。だが意外にしっかり腕にかかえられていて身を離せなかった——彼女の狼狽の挙措で、ペレウスがぱちりと目を開けた。

「起きたんだ……ファリザード」

「お、おまえ、なんだこれっ………どういう………」

「大きな声をあげるんじゃない。あの賊たちはきつとぼくらを探している。川からはだいぶ離れたつもりだけど、こうしているいまも

斥候がそばにきているかもしれない」

はりつめた危機感がかれの口調にはある。はっと記憶がよみがえり、フアリザードは青ざめた。

そうだ。砂漠の賊に襲われたのだ。フアリザードの一行は眼前のこの少年以外、全員が殺された。ペレウスが助けられなければ、彼女自身もどんなひどいことになっていたかわからなかった。

短めのはちみつ色の髪をかれの鼻先で振るように、首をすばやくまわしてフアリザードは周囲をみてとった。

壁も天井もごつごつした岩であるところからして、洞窟内だろう。すこし離れたところに、フアリザードの愛馬である黎明号^{サハール}が腹ばいに寝そべっていた。彼女の視線をたどったペレウスが「黎明に礼をいうんだね」と告げた。

「そのかしこい馬がいなければ、ぼくらふたりともいまごろ川に流されるまま冥界に下っていた。

黎明は、ぼくらがとびこんだあの濁流が勢いを弱める場所にきたとき、必死に泳いでぼくらを対岸にとどけてくれたんだよ。そのあとぼくがきみを連れてこの洞窟まで逃げてくれたのも、黎明が疲弊をいとわず走ってくれたからだ。いまはさすがにへばってるけど」

「お……おぼえてないぞ。川に入って水を飲んだあたりから」

「それはそうだ。きみは完全に溺れていた。

応急処置で心臓はすぐ動いてくれたけれど、手足がすっかり冷たくなっていて、ここに運び入れたときは意識がないまま震えはじめていたんだ」

はなはだしい疲労を声ににじませながら説明するペレウスに、フアリザードはなにもいえなくなった。

たしかに濡れた服を脱がせなければ体温がどんどん下がる。砂漠の夜は霜がおりるほど寒いのだ。火をおこすわけにはいかなかったのだろうし、そうなると温める手段は原始的な素肌以外にない。しっかり抱きしめるのは、肌の触れ合う面積をなるべく多くするためだ。ペレウスがこの状況でできうるかぎり最善の処置をただけだということとは納得せざるをえなかった。

だが、だからといって、こんな……紅潮しきって、ファリザードは目を回しそうになった。

裸と裸——同年齢の子供相手とはいえ、こんなふうに男の肌に密着するのははじめてだった。

少年のにおいが鼻腔を満たしている。青い牧草のような若々しいにおい。

少年の落ちついた心音が胸板から伝わってくる——こちらのどんな早くなる鼓動も相手に伝わってしまったているだろう。

（どうして？）

ファリザードは相手の胸にひたいをくっつけるようにして再度、顔を埋めた。赤らみきった表情を見つめられるよりそのほうがましだった。人族であるペレウスは彼女とちがい闇中ではよく見えないだろうとわかっていても、耐えられなかった。

（どうしてここまで恥ずかしいんだ？　ちょっと前まで、こいつらヘラス人の視線なんて無視できていたのに）

犬に裸を見せても羞恥心を覚えないのとおなじで、ファリザードはペレウスをふくむ異国人——彼女の父が館にとどめているヘラス人の少年たち——に肌をさらすことなどなんとも思っていないかった。透ける薄衣や、装身具だけつけた半裸は、ジンの女性の邸宅内で

の格好としては珍しくない。ファリザードはそれらの姿で悠然とふるまい、異国人の目などさらさら考慮しなかった。かりに相手の目に欲情が浮かべば、嫌悪感を覚えてさげすみの念をあらたにするだけだ。犬の発情を気にしてこちらが衣装をあらためる必要がどこにあるう。

……などと気張って、大嫌いなヘラス人たちのまえでことさら傲然とふるまっていたのに。

緊張に体の芯から震えながら、ファリザードは気づいた。いつのまにか、相手は汚らわしい異国の犬だと見下げることができなくなっている。

恥ずかしいのは、いつしかこの相手を対等とみとめてしまっているからなのだ。

——決闘でかれに負けたからか。

——求婚者がいれば彼女がはねつける側だったはずなのに、かれには「ぼくに触るな」と逆にはねつけられたからか。

——ヘラス語ではなく彼女の国の言葉で「友達になろう」と正面から言われたからか。

——そのすぐあと、窮地を救ってもらったからか。

救われたときの状況を思うと、さすがに異国人がどうのと言う前に恩を感じざるをえない。あそこからふたりして生きて逃げられたのは奇跡だ。

（なんで危険をかえりみず出てきてくれたんだろ……）

いまになってそのことが気になりはじめ、ファリザードはためらいがちにそっとたずねた。

「……死ぬかもしれないのに、なんで飛び出してきたんだ？」

とたん、それまで疲れきった様子だったペレウスが雰囲気を一変させ、彼女の頬に手をそえて顔をあげさせてきた。厳しくひきしまった表情——強い意思を宿した少年の瞳に間近からみつめられて、フアリザードは息を呑んだ。

「ぼくにはきみが必要だからだ」

低い声で告げられて、心臓がどきんとひときわ強くはねた——が、
「……生き延びるために」と続けられてなんとか落ち着く。まだ鳴っている胸を少しでもしずめようとおうむ返しにつぶやいた。

「生き延びるため、わたしが必要……？」

「ぼくらは賊の出没する地域から一刻も早く離れなければならないけれど、水の入る革袋は小さなものをひとつしか見つけられなかった。

水が足りないなら来た道へは戻れない。雨がやんで砂漠の川はいまごろまた涸れているだろうし、途中の泉は死んでいて飲めないから。

しかし先へ進むにしろ水をどこかで補充するにしろ、ぼくには知識がない。きみがもともと目指していた村への道筋を知らないし、このあたりにある湧き水の場所も知らない。

きみという砂漠の案内人が必要なんだ」

らんらんとぎらつく少年の瞳——強烈な復仇の決意がそこにはある。

「かならず無事なところまで逃げ延びて、賊の情報をきみのお父上

に知らしめる。

あの賊どもは許しておくわけにはいかない。ぜったいこの目であいつらが縛り首になるのをみとどけてやる」

鮮烈な激情を伝えられ、ファリザードの脳裏にも、衛兵や人夫たちの死に様がありありとよみがえってきた。

（わたしは卑劣な賊の口車にのって、父上の臣下や領民たちを死なせてしまった）

われ知らず少年の齒噛みに同調する——そうだ、あの嘘つきの邪教徒どもだけは許さない。裏切られた誓いと与えられた屈辱の数々を思い出し、ファリザードの瞳はペレウスのそれと同じ種類の光を帯びた。口をひらいて、かれにしずかな声で約束する。

「——血の貸しは利息ごと取り立てるのがジン族の古いならわしだ。わたしの一族は、殺された忠義者たちの仇をかならずとる」

「復讐はきみたちジン族の専売特許ではない。ぼくだってせっかく親しくなった仲間を殺された。

きみのお父上には、かなうことならばくを討伐隊にくわえてもらいたいと申し出るつもりだ。

でもそのためにはまず、生きて安全なところまで行かないと」

とりまとめてから、かれは「あと……」と微妙に齒切れわるく言葉を追加した。

照れくささで緊張したのかその腕にわずかに力がこもる。かれははじめて含羞を感じさせる声で、

「……もう不毛な喧嘩はやめて仲良くやることにしただろう？ 友

達だからってだけでも助ける理由にはじゅうぶんだと思うけど」

（だから不意打ちでそんなこと言うな！ やだ、だ、抱き寄せるみたいにするなっ……！）

少年の腕のなかにいることをいやでも思い出させられ、ファリザードは顔から火が出そうになって内心で悲鳴をあげた。復讐の話でせつかくこの状況を忘れていられたのに。

体の前面に意識が集中してしまう——ファリザードの成長途上の乳房、すべらかな腹、下腹から太ももは、少年のいまでは意外にひきしまった体と密着してしまっていた。

かれの胸板にこすれるためか意識しすぎたためか、乳首が固くなりはじめたことに気がついて頭が煮えた。ペレウスにそれを気づかれたらと思うとこのまま消え入りたくなる。

ファリザードは泣きそうになって祈った。

（気づくな。気づかないで）

幸いにしてというべきか、ペレウスは死にそうなほど疲労困憊しており、彼女の胸中にも胸の尖端にも興味を向けるどころではないようだった。「……寝る」とかれはつぶやき、唐突に体の力をぬいてぐったりした。

いそいでファリザードは自分とかれの体のあいだに腕を入れ、胸をかばうようにしてわずかに距離をあけた。

が、急速にまどろみに入りつつあるペレウスが、眠たげな声をかけてくる。

「ファリザード……」

「な、なんだ」

「もつとちゃんとくつついて……すきまを作られたら寒いよ」

「ばっ、ばか、調子にのるんじゃない……」

狼狽しながら言いかけたが、少女の恥じらいゆえの文句を最後まで聞くことなく、ペレウスはことごと眠りに落ちてしまった。

寝入りの冗談のような早さにファリザードは絶句したが、考えれば無理もなかった。

かれは血路をひらいて賊の集団から彼女を救い、洪水の川をわたりにきつて、乗り慣れない馬を駆つてここに彼女を連れてきたのだ。死の瀬戸際から脱出することで緊張が切れたとたん、極限の疲労で長く意識をたもてなくなってもおかしくない。

（わたしを助けたから疲れてるんだよな）

さんざんためらつたのち、おずおずとファリザードは言われたとおり身を寄せた。かれの背に片腕をまわし、思いきつてぴったり肌を合わせなおす。

熱い頬をかれにくつつけ、凜々しげな形のよい眉を下げて、うう、とうなる。

（これはしょうがないんだから）

体温を分け合うためだ、生き延びるため——自分にそうは言い聞かせてみても、羞恥はどうしても薄れてくれなかった。美貌は完全に真っ赤になつてしばらく戻りそうもない。

「眠れなかつたらおまえのせいだからな……ペレウス」

八つ当たりもこめて、かれの名前をつぶやいてみた。
いままでまともに名を呼んだことはほとんどなかったが、

（これからはちゃんと名前では呼ばないと……ともだち、……になったことだし）

「ペレウス、ミュケナイのペレウス」

それにしても妙だった。くりかえし小さく呼んでみるたび、へんにむずがゆい高揚感がこみあげるのだ。速まった血流が全身を火照らせて、ファリザード自身はもう温まる必要を感じないくらいだった。

急に、ぎゅっときつく抱かれた。あえぎに似たかすれ声が喉から出てしまう。

「あつ……」

無意識ながら、名前を呼ばれたことに反応してか少女の体温の高さを感じてか、昏々と眠るペレウスが強く抱擁してきたのである。

濃い果実酒の杯でも唇にふくんではいる心地がした。ひどく甘酸っぱくて、酩酊したように夢々^{ぐぐぐ}させられる。初めての感覚と顔の熱をもてあまして、ファリザードは目をぎゅっとつぶった。

ほんとに眠れないかも、と千々にふるえる愁い半ばのため息をつきながら。

EX 1 小夜の寝覚め（後書き）

本編第20部と第21部のあいだのお話です。

EX2・手袋（前書き）

ラブコメ第二弾。今回はもじもじ系です。

EX2・手袋

山脈がかなたにみえる村——途中で出会った騎馬部族を新しい護衛隊として、ペレウスとファリザードは旅の終着地にようやく至っていた。

村は湧き水に恵まれ、周辺は砂漠というより草原である。

畑には水路がはりめぐらされ、葉が青々としたアズノ木が植えられている。漆喰とレンガで建てられた茶色い家々が点在していた。ファリザードたちが滞在する村長の家は石造りになっており、日中でもひんやりとしてここよかった。

旅装を解いたファリザードは、へそを出す長袖の赤い胴衣と、ゆったりした草色のスカートを身につけた姿になっていた。

窓ぎわにクッションをおいて編み棒をたゆみなく動かしている……
…といたいのだが、しばしばその手は止まり、そのあいだ彼女は窓の外をながめている。

庭先で、ジン族の男が、人族の少年ペレウスに体術を教えているのである。

「相手の手首をこうやってとらえ、外側へねじるのだ。やってみなさい」

「こ、こうですか？」

「だめだ、つかみの時点で力みすぎだ。
指先に力を入れようとすると、そのひらを相手の手の甲に吸いつかせるように密着させて握るのだ。」

そして腕ではなく腰の力でねじって投げる。このように」

「あいたたたっ！」

庭を闊歩するニワトリや羊の鳴き声に、少年の悲鳴が混じっている。

（怪我したばかりなのにあんなことに夢中になって、ペレウスの右手はだいじょうぶかな。無茶をいいたしたらほんとうに自分を曲げないんだから）

フアリザードは眉を下げたため息をついた。とはいえ口の端には微笑が浮いているのだが。

彼女の前で向い合って同じくクッションに腰かけている老女が、「いちいち気にしなさんな、嬢ちゃん」と編み棒をかざしていった。動作のきびきびとした、姿勢のよい隻眼の老女である。騎馬部族の女族長ユルドウスであり、庭にいるジン族の男はその夫クタルムシュだった。

「うちのクタルムシュはあれでも三百年の齢を重ねたジンだ。教える方も坊やの怪我の程度もこころえているよ。ほら、教えているのは左手の技だろ？」

それよりあんだ、いちいち手を休めるんじゃない。あたしがここで編み棒なんかにぎっているのはあんだが『教えてくれ』って頼んできたからだろうが」

「う……すまない。だって、頼るはずだったわたしの乳母が巡礼中で村にいないとは思いませんでしたんだ」

「だからあたしを村内に呼んだわけかい。
まったく、人に似合わないことさせといて、自分はぼけっと恋し

い男にみとれてんじゃないよ」

「こ、恋しくない！ みとれてないっ！」

「五歳児すらたばかれそうにない嘘をつくんじゃないよ。説得力をもたせたかったら窓の外を熱っぽい目でみるのをやめな。」

「だいたい編んでいるその手袋からして、坊やにあげるために編んでいるじゃないのかい」

「たしかにそうだけど、これはお礼みたいなもので……」

往生際悪く言い訳するファリザードの声が、尻すばみに小さくなる。

——手袋をあげたいとはじめて思ったのは、砂漠でふたりきりだった数日前の夜のことだ。寝ているかれの手におずおず触れてみて、冷たさに気づいたときだった。

状況に緊張してこぶしを胸元にちぢめていた彼女のほうは、手が冷えることはなかった。

相手の体に腕をまわして抱きしめてくるのは、いつもペレウスからだったのである。指を広げた手が冷涼な外気にさらされるため、かれの手は起きるころにはこわばるほど冷たくなっていた。

（眠るときも、わたしが冷えないように守ってくれていたんだらうか）

考えすぎだろう、単に彼自身がぬくみを求めていただけ——とわかってはいるのだが、そう夢想するだけで胸奥に桜色の熱がじんわりしみこんでくる。

いつしか視線がまたふらふら庭へと流れていた。

「坊やの姿がみえるところだとどうしても気が散るようだねえ」

不機嫌そうにユルドウズが鼻を鳴らし、ファリザードはあわてて顔を前に戻した。

すこし暗くなるけど場所を窓辺から離すかね——といわれそうなことを見てとり、「気になったんだがつ」とつさに質問をもちかけて強引に話を変える。

「ユルドウズは人族なのになんでジン族と結婚したんだ？」

「よくよく集中の続かない子だね……いや、なるほどね、最初からそれが聞きたかったわけかい」

ユルドウズがますます顔をしかめて再度鼻を鳴らす。ファリザードは首をすくめて赤くなった……が、否定はしなかった。

編み物を教えてほしいというのは彼女を呼ぶ口実だった。乳母が不在でも、編み物を手ほどきしてくれる女くらはこの村じゅうにいるのだ。あえてユルドウズを、村外に設営された彼女の部族の野営から呼んだのは、異種族間結婚の話を聞きたいがためだった。

「だってその、ジンと人の夫婦なんて変……いやすまない、あんまりないことだろう？」

「変でいいって。じっさいかなり妙ちきりんな取り合わせだと思うし。猫と犬が夫婦になるようなもんだからね。

いやはや、自分たちのことながら四十年前は頭がどうかしてたんじゃないかってたまに思うね」

「そ、そこまでは変じゃないはずだ！」

つい前のめりになってクッションから腰を浮かせ、否定の声をあげてしまった。

「ほう」してゆったりとユルドウズがにやりと片頬をつりあげる。われにかえってファリザードは頬を燃やしたが、気を取りなおし、なかったことにして次の問いに進む。

「子供はできなかったのか？」

「できなかったね。といつても、人族の女とジン族の男の組み合わせだからかもしれないけど。人族の男とジン族の女ならたしか前例があつたんじゃないかい」

「そ、そうか……うん、そうか……」

その、まわりの反応はどうだった？ 一緒になつたとき反対されなかつたのか」

「そりやもう、されたに決まつてら。あたしやクタルムシュの親戚から何度が殺されかけたよ。この左目はあいつの弟につぶされたのさ。」

おしまいにはクタルムシュは一族と絶縁しちまつたよ」

ファリザードは息をのんだ——自身の兄たちのことを考えた。彼女とヘラス人との結婚に反対してきたかれらのことを。「このような結婚を受け入れることはないぞ、いま父上は少しおかしいのだ」といちばん歳若い兄が慰めてくれたことを思いだす。ファリザードがペレウスに惹かれているなどと知れば、かれらはどうするだろうか。妹もおかしくなつたと蔑むだろうか。

「……まわりに祝福されなかったのに、そこまでしてなんで一緒になっただ？」

「んなもんクタルムシュに押し切られたからに決まってる。あいつしつこいの何のって」

なんだかはぐらかされた気がして、ファリザードは眉を寄せた。ユルドウズは微妙な顔をしたファリザードをみて鼻で笑った。「あんたみたいな色気づきはじめて子供は好いた惚れたの話を聞きたいんだろぅがね」とからかう調子でいう。

「あたしゃ気に入ったお宝ほどしまいこんでひそかに愛でるたちなんだね。」

うちの人とのそういう思い出の詳細は、なるべくふたりの秘密にしたまま墓に入りたいのさ」

のろけと話題の封殺が同時に行われて、ファリザードは話の続けようがなくなった。

そのうえにユルドウズがおつかぶせるように、一転してそっけない言葉を発した。

「あんたがこの先どうするかはあんたが悩みな。」

悪いがあたしゃ部族に責任をもつ族長だよ。ジンの大貴族であるあんたの家がこのことでごたごたするなら深入りはしたくない。『騎馬部族め、ファリザードによけいな入れ知恵を』とだれかの恨みを買うなんてごめんだからね」

ぐうの音も出ない。

それでも、ファリザードはあとひとつだけと訊いてみた。

「……幸せになれた？」

問うようなものではない愚かしい質問であることはわかっていた。それでも答えを聞きたかったのだ。

「そうさね。望んだ道を選べてとくに後悔もないから、ばちばちだろうね」

編み棒を止めて編み目を検分しながら、ひとごとのように淡泊な口調でユルドウズはいった。

それから、

「どのみちあたしがいえることはないよ。嬢ちゃん、あんたのなかで答えはもう決まっちゃってしまっているんだろう」

唐突に看破されてファリザードは固まる。

顔を上げたユルドウズがふふと笑いかけた。若かりし日の凜とした美しさを残す面立ちのなかで、隻眼がふと優しい光を帯びた。

「ジンの恋だものねえ、転がりだしたら歯止めなんてきかないだろ。これでも連れ合いがジン族だから、多少はわかってるのさ」

うまくいくといいね。

そう声をかけられて顔を伏せ、ほんのりと頬を染めて「……………」

うん」ファリザードは小さくうなずいた。虫の羽ばたき音並みに小さな声だった。

……………

……………

……………

ファリザードの編んでいた手袋は、翌朝に完成した。
完成したものをしげしげと眺めた末に、開口一番彼女はいった。

「これは捨てる」

「捨てるんじゃない、お馬鹿！」

「こんなみつともないものを渡せるもんかつ」

若干情けなさそうなファリザードの手に、赤い毛糸のかたまりがある——分厚いそれには指がついており、かるうじて手袋だとわかる程度の出来である。

呆れ顔でユルドウズは首をふった。

「夜のうちに一気に進めたのかい？ 集中したら速いじゃないか。
でも初めてなんだから、焦らずやればよかったのに」

「いいんだ。実をいうとこれは最初から練習用として編んでいたんだから。もう一枚、今度は丁寧に編もうと思っている」

「いいじゃないか、初めての作品だから下手だけどといって渡せば」

「いやだ。こんなのペレウスにみせられない。もっと上手にできたものを渡す」

ファリザードはぐつと両手をにぎりしめて大真面目にいった。

「わたしが作ったものにふさわしい出来でないと、ペレウスのなかで、なにごとにも完璧な美少女というわたしの印象が傷ついてしま

うじゃないか」

「ははは、このガキ、なかなか自己評価が高めにかっ飛んでるようだね」

乾いた笑いをして半目になったユルドウスだったが、ややあつて肩をすくめた。

「ま、あんたがそういうならいいけど。捨てるのはもったいないよ。」

あたしによしな。この村に雑貨を取り扱ってる小さな店があったね。ちよっくらその店主にこの習作を引きわたしてやる。

製作者を伏せておくからそれでいいだろ」

.....

その日の夕食前。

第二の手袋をせっせと編んでいたファリザードが、ぷるぷると震えはじめた。

彼女が凝視しているのは、クタルムシュとともに村長の家に入ってきたペレウスの手にしたものである。

陶器でらくだの乳の酒をすすっていたユルドウスが、思わず破顔した。口をぬぐい、笑いにひくひくと口の端を歪めながらユルドウスはいった。

「おやまあ、個性的な手袋」

持ち帰ってきたものに言及されたペレウスが、にこりとして高々と戦利品をかかげた。

「体術修練の合間に、クタラムシユさんに雑貨屋で蜂蜜入りの薔薇水を買ってもらいました。

その雑貨屋でこれを見つけました。ちょうど手袋欲しかったんですよ！」

「ぷつ、く、くひひ、いやしかし、不恰好な手袋だね」

「笑うほどですか？ まあ不恰好なのは確かですけど、ちょっと形が崩れているのはしょうがないですよ。由来を聞いたら、なんでも編み物初心者の女の子がはじめて作ったものらしいですから。

でもそのおかげでただ同然に安かったんですよ！ もったいないと思いませんか？ 素材は新品同然なのに」

腹を抱えて笑いの発作をこらえているユルドウズが、そばのファリザードにしか聞こえない程度につぶやいた。

「きひひひ、ああ、そっぴや雑貨屋に引き渡すとき適当にそう説明したね……」

笑顔でペレウスが手袋をぶらぶら振っている。

「でも心をこめて編んでくれたみたいで、編み目はしっかり詰まっていますから保温には問題なさそうです。

ぼくにとっては掘り出し物ですよ。銅貨一枚で買えました」

「だめーっ！」

「うわっ!？」

限界に達したファリザードが編み棒を放り出し、かけよって手袋をもぎとろうとした。

目を白黒させながらも手袋を奪われまいと背にかばったペレウスが、おっかなびっくり訊く。

「な、なんだよ、ファリザード」

「それをよこせ! そんな手袋だめだ!」

ファリザードはペレウスの背中側に回りこんで手袋を奪取しようとする。ペレウスがむっとした表情になった。

めまぐるしく伸びてくる彼女の腕から手袋を防衛しつつ、かれは訊いた。

「だめと叫ばれても……なんだか知らないけど、頭ごなしにぼくの買い物に文句つけられるいわれはないんだけど。

それともなにか理由があるの?」

「だって、もつと形がきれいなもののほうがいいだろ!？」

「ちよつとばかり崩れてたからなんだというんだ。ぼくはこの手袋が気に入ったんだ」

「き、気にいった、って……」

ファリザードがどもり、急速に腰砕けになった。

初めて編んだものが結果として好きな人に褒められている状況に気がついたのである。

「こういう実用的なのが趣味に合うんだよ。ぼくの国の現在の主流文化は儉約と質実剛健を旨とするんだ」

笑いをようやくおさめたユルドウズが「それって単に貧乏なのでケチってるってことじゃないのかい」とつぶやいている。その声を気にしないペレウスは天地に恥じるところはないとばかりに胸をそらした。

「とにかく、このモコモコした感じも含めて好きになったんだからいまさら手放さないぞ」

「好っ……!？」

フアリザードが絶句した。尖った耳の先まで熱を運び、焼きリンゴのようになった両頬を押さえる。湯気が頭頂から出そうである。いきなり彼女が半泣きで静かになったために、ペレウスは意固地な態度を大幅にゆるめた。「え……そんなにこの手袋が気に入らない？」とこわごわ尋ねはじめている。

ユルドウズとクタルムシュの夫婦が、すこし離れた炉端から面白そうにそれを眺めているのだった。妻が夫の腕をつついた。

「ところで、嬢ちゃんのほうはみでの通りだが、坊やのほうは嬢ちゃんをどう思ってるんだい？」

腕を組んだクタルムシュがあごをつまんで「ふむ」と声を洩らした。

「どうも判然としない。あれはまだ体を動かすことのほうが楽しい

時期だな。

そうなるとファリザード殿のほうから動かねばならんだろうが、あの娘はまず赤面症を治したほうがいいな。好機がくるたびあのよ
うに固まっ
ていては
どう進展
しようも
ないぞ」

「まあそのうちどうにか勇気をしほりだすだろ。

それにしても、色恋沙汰は自分が話の種にされるとなると真っ平
御免だが、他人のはみてるだけで楽しいもんだねえ」

「悪趣味だぞ、ユルドウズ。しかしまったく同感だ」

EX2・手袋（後書き）

本編26部「クタラムシュとユルドウズ」で省いた村滞在中の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7783r/>

ジンニスタン EX

2011年10月1日11時02分発行